

共同研究「里川」－問題の設定と研究方法

1. 里川を研究する理由と思い

本研究の目的は「里川」という言葉に、新たな意味を盛り込むことにある。

新たな言葉をつくり、既存の他の類似の言葉やその来歴との差違を強調しないと、私たちの関心を納得する形で表現することができないと感じているからだ。

その関心とは、「人々が協力して川を守りつづける」という、ただその一言を解き明かすことにある¹。それにより、私たち、そして子ども、孫の世代が暮らす時代に適応した提案ができるのではないかという、暗黙の思いもある。

歴史を振り返れば、川は常に人々の協力の下に、時代毎に守られてきたとあってよい。本研究でもおそらく問題になるであろう高度成長期であっても、川は人々の協力により守られてきた。要は「人々」の意味が、時によっては比較的狭い地域に集住し地域組織を形成している人々を意味する場合もあれば、何十万・何百万人という人々を指す場合もあった。後者の場合は、地域組織では対処できないと思われたために、国・自治体等が川を公共財として管理し守ってきた²。このおかげで、私たちの暮らしは、常識的な意味では豊かになった。

1990年代に、高度成長の時代は終わった。現在、私たちは「人々が協力して川を守り続ける」上で、二つの課題が発生していると考えている。

第1は、守ることの前提にあった水に対する感覚が忘れられようとしていることだ。「水感覚の喪失」である。

現代の日本人は、一見、豊富な水に取り囲まれ、水から多大な恩恵を受けているとあってよいだろう。水を供給する堅牢な技術の上に私たちの暮らしは成り立っているし、私たちもそのような条件を前提に暮らすようになった。このため、水を守ろうとする出発点にはあった、水が本来的にもつ怖さ・危うさや、水のもつ恵み等の意識を、いつのまにか感じなくても済むようになってしまった³。

第2は、水との関係における社会的ジレンマの発生だ。

飲み水の量・質、不安定な食糧生産、気候変動、等々、水が主要な変動要因となっている様々な自然・社会現象により、暮らしそのものが揺らぎ始めている。しかし、一方で、かなりの生活者は、上下水道・住宅・土木技術など多くの技術が可能にする快適な暮らしは続いてもらいたいという気持ちをもっている。さらには、生き物の言い分というものを

¹ ここで「川」は、自然・人工の流れを意味する。川だけではなく、用水、水路、運河、さらには給排水路なども含める。以後も同様。

² この論理が破綻しつつあることを、いずれ述べることになるが、ここでは「暮らしを支えるシステム」の継続性を強調するために、このように表現しておくこととする。

³ もっとも、最近では、地球全体から見れば水が「稀少な財である」という価値が浸透しつつあるが、そのような価値付けが「みんなで水を守り続ける」という面で良いのかどうかはよく検討する必要がある。

取り入れるべきかどうか、是非はともあれ、それだけを取り上げれば考慮に入れた方が望ましいとも思っている。

快適な暮らしを享受しながらも、現代の暮らしにおいて水がもつ「危うさ」を直視しようとする、その快適な暮らしが脅かされない。まさに暮らしと水利用の間に、「あちら立てば、こちら立たず」「わかっているけど、やめられない」という社会的なジレンマがある。

水についての意識が希薄な中でこのようなジレンマから抜け出す一つの方法に、自分の水体験の唯一性を強調し、他人との対話による社会的決定からは目をそらすという態度がジレンマから抜け出す一つの方法と重視する立場がある。「人はそれぞれ独自の水との関わりをもっているのだから、社会はそれについてとやかく言うべきではない」という立場である⁴。しかし、守り続ける上では他人同士が対話して協力して行動して責任を負うという、何らかの共同性が必要なことも否定できない。個人の水体験の独自性と、個人の活動的な生き方が、このような共同性を支え、結果として個人や社会の活力を生むようなしくみを考える必要がある。

つまり、いま必要なのは、変動しつつある暮らしの現場に足場をすえ、ジレンマを生む構造そのものを、「個人と社会の関わり方の構築」という平面で問題にし、その検討を踏まえ「水を協力して守り続ける」方法を開発しなければならないということなのだろう。

このような問題意識を、「～に役立つから守るのだ」と考える効用論の立場と区別するために、「関わり論の立場」と呼ぶことにしよう。

2. 問題の所在

「水を協力して守りつづける」上で、現在一番見えないのは都市部である。都市部（郊外都市も含む）は、水感覚の喪失と、水利用と暮らしのジレンマがもっとも先鋭的に現れている場所である。さらに、そのような問題を生むもととなっている、高度成長期の暮らしを保証するための人工的なインフラが堅牢に造られた場が都市部といえるだろう。

水を協力して守りつづけるという目的に、高度成長期に造成された都市というしくみが、適応しなくなっているのである。

さらに言えば、人間は生活していくために環境をつくり、適応し、それが生活に影響を与えるという循環を繰り返す。高度経済成長期以前は、「水を守り続ける」システムとして、いわゆる「里山」に見られるような生活と自然環境の調和が見られた。が、現代はわたしたちの生活も変化し、高度成長ならぬ持続的成長が望まれる中で、水を守り続けるための代替システムが明確ではない。

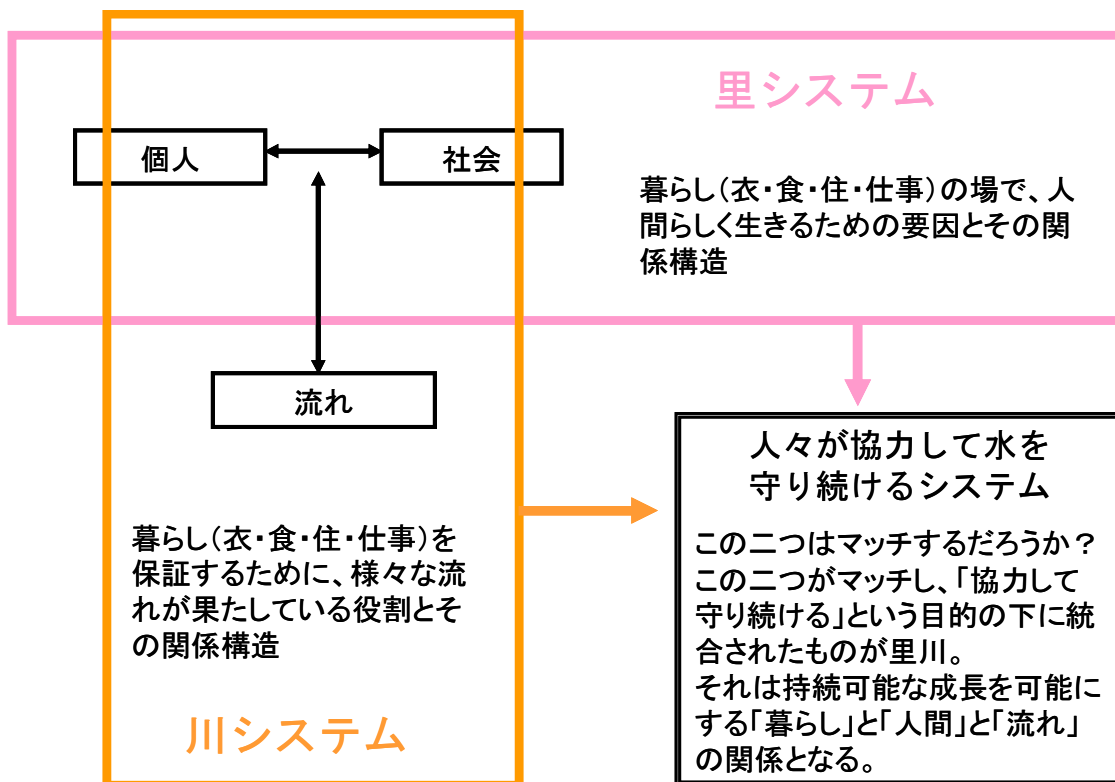
したがって、問題は、「高度経済成長以前の自然と社会の理念形」と「現代」の断絶、あるいは「自然環境」と「暮らし」の分断にあるのではなく、「水を守り続ける」システムとして、各時代の条件に人間はどのように環境をつくり、適応し、生活を変えてきたかとい

⁴ 個人の唯一性を過度に強調しすぎると、「共同的、社会的」な制度や慣習は絶対的なものではなく相対的なものであるという感覚を生み、自分が社会の中で活動するために拠って立つ共同的な規則など意味がないという精神構造に陥りやすい。私見では、新たな水との関わりを生む運動が「参加」以上に進まず、「関わりを持続させる自立的な協力組織」にまでなかなか進まない背景には、このような倫理観が潜んでいるような気がしてならない。個人の経験を尊重しながらも、相対主義に陥らずに、水を守る共同体を形作るという狭い道を歩まねばならないのだろう。

う、適応的社会形成のプロセスの中で現代と将来像が見えないことにあると考える。このプロセスを分析することで、今後の見通しを説明できるものと確信する。

このような意味での「水を守り続ける」ためのシステムを、第1節で述べたような「関わり論」の立場から分析する構図を示すと以下のようなになるのではないだろうか。

図：「関わり論」的、里川研究の構図



上図で、川システムは比較的調査を行いやすい。この川システムを「それぞれの水利用」という側面から観察することで、「人々が協力して水を守り続けるシステム」をつくるために、どのような価値意識や社会関係が重要なのかを、暮らしの平面で捉える。様々な川システムに対応した里システムを明らかにしていくことが、本研究の方向となる。

この川システムと里システムがマッチし、統合されたシステムが、人々が協力して水を守り続ける現代の目的に適合したシステムとしての里川ということになるのだろう。

3. 今年度の研究テーマ

以上の方向性を共通認識にした上で、今年度は各研究員が以下のテーマに取り組む。そして、それを取りまとめ、「里川とは何か」というまとめを行うこととする。

最終報告書を意識した、各研究員のテーマ内容は以下の通りとなる。

(1) 暮らしの中での川－流れ：利用マップ、川利用の価値感覚と社会的ルール

- ・現代の暮らしの中での水利用の一覧と、その歴史の変遷、経緯を明確にする。
- ・水を利用する時に念頭におくべき価値の意識、ならびに、個人的・社会的意思決定のルール、それぞれの歴史を明確にする。

①「阿久比川マップの作成」(荒田治彦)

阿久比川流域を実際にトレースし、川とヒトとの関わりを、独自視点にて評価、色分けすることでマッピングを行う。

実際に現地調査することで、視点の切り口も追加見直しを行いながら試行錯誤で作りこむ。

<視点(案)>

- ・癒され度(風景を含め、つながりが感じられるかどうかで評価)
- ・接触度(川べりまでどこまで近づけるか)
- ・利用度(生活や仕事に利用されている度合いを評価)
- ・・・・

<方法>

- ・川に沿って移動し、ポイントの風景を写真撮影
- ・視点に沿って色分けを行い、

②「神田川流域から見た都市における住宅と集合住宅の水利用」(賀川督明・一枝)

神田川と神田上水を合わせた流域をフィールドとして、人と「水との関わり」を捉える。

1) 水との関わりを視点とした、住宅と集合住宅と土地利用の変遷

たとえば

トイレ、風呂、台所といった水まわり、
屋根、樋といった屋根まわり
井戸、湧水、河川利用、上下水道
などなど

2) 荒田氏が阿久比川をフィールドとして調べる項目(テーマ①)と同じものを調査。

都市の河川のあり方が浮き彫りとなるようにしたい。

3) (2)の⑩「実験的な水利用住宅から見る、家の中、意識の中の里川」（後出）で調査した結果を踏まえて、2020年の「里川ハウス」とその集合体をこのフィールドに企画する。

③「視点としての『暮らしの水利用』－20世紀東京における生活社会史から見る水利用者の意思決定構造の変遷」（中庭光彦）

里川研究では、水利用を、川との関わりの中で位置づけるだけではなく、生活の中で位置づける必要がある。そのための作業として、生活における水利用一覧をデータベース化した上で、歴史を辿り、水利用の通時的・共時的マップをつくる。

その上で、水利用の価値観と社会的ルールの変遷を追い、水利用者の意思決定構造の差を比較する。

おそらく、90年代以降、水利用の個人的・社会的意思決定基準が、効率重視からリスク低減を含めた様々な価値基準に重心が移っていることが予想されるが、その仮説が支持されるのか。支持されるならば、都市生活の場面でどのような水利用が発生しているのか等、生活の場における意思決定構造とその結果の変遷を明確にする。

（2）様々な川－流れ－個別テーマ

「川システム」を構成する様々な水利用のテーマを各研究員が調査。そして、各研究員とも、それぞれのテーマにおける「里システム」を明らかにするために、「①現状把握」「②歴史の把握」「③水利用と生活のジレンマの内容」「④問題点の評価と、提案」を行う。

①「なつかしい阿木川」（大橋一弘）

私は、昭和16年8月、現在の岐阜県恵那市での阿木川下流の地に誕生し、高校を卒業するまで、この地で生活していました。これは1941年の太平洋戦争開始直前から高校3年卒業の1959年までの18年間になります。ちょうど、その時代は、戦争、昭和20年の敗戦、それからの立ち直りと激動の時代でした。また、昭和30年代になると、もう戦前ではない、と言って、生活に少し余裕が生まれ、生活環境も少しずつ変わっていった時期でした。しかし、私が子供の頃の昭和20年代は、まだまだ、戦前からの多くの古くからの習慣や人々の生活が残っていた時代でもあった。水の方面で考えると、この昭和20年代の頃のこの地方では、まだ、水道もなく、井戸と川とで生活をし、特に川とは今と比較にならないほど密接な関係を保っていた時期でした。そこで、この阿木川での当時のこの川周辺の環境や、川の環境を調べ、人々と川との関係、子供達の川への執着を調査し、現代での里川への参考資料としたいと思います。具体的な検討内容は下記の順に調査したいと考えています。実際は、現地で調べる事が多いと思い、久しぶりに故郷へ出かけて楽しみたいと思います。

調査内容

- 1・阿木川の全容と歴史
- 2・阿木川の植物と動物

- 3・昭和20年代での大井町栄町の人々の生活
- 4・人々と川との関係の変遷
- 5・子供達の川への興味の変遷
- 6・現代での人々と水との関係

②「知多半島阿久比川水系における生態学的景観の変容と周辺住民の生活史との関わり」(富田啓介)

研究内容：

愛知県知多半島中部、半田市および阿久比町を主な流域とする小河川・阿久比川水系を事例に、昭和初期（余裕があれば近世）から現代までの生態学的景観の変容を明らかにする。また、見出された景観ユニットごとの（生態学的な）評価も行いたい。続いて、その景観変容をもたらした周辺住民の生活史や地域構造の変遷にも着目し、その関わりについても検討する。

研究方法：

空中写真の判読結果や各種地形図・資料をもとに、生態学的な景観の変容をとらえ、現地踏査によってその現状を把握する。生活史に関しては周辺住民より聞き取りを行う。

③「自然再生推進法と近自然工法そして里川に接点はあるか？」(吉田稔)

テーマ主旨：

日本の近代河川の歴史を振り返り、河川と自然と人がどのような係わり合いながら変遷してきたかを、具体的事例に基づき把握する。

近代河川の歴史で「公」の果たしてきた役割は、あまりに大きく結果として人々にとって遠い川を作ることになった。

今再び、「公」の旗振りの元に始まっている「多自然型川づくり」・「自然再生法」をいかに「里川」づくりの視点にたって、新たな河川事業に活かしていきたい。

すなわち「新しい公」とコモンズの思想を活かす川づくりをめざす。

調査対象：「庄内川」流域

内容：

- 1)近代日本の河川事業と人々とのかかわりの変遷
 - ・ 高度成長以前と以後の差異
 - ・ 高度成長以後の反省と多自然型、自然再生川づくりの功罪
 - ・ 以上の変遷の中における人の位置付け、関わり
- 2)自然工法の歴史と現実と具体的事例
 - ・ 近自然工法の始まりと背景
 - ・ 近自然工法の成功/失敗事例

- ・ 日本の河川事業に与えたインパクト
 - ・ 人との関わり方について
- 3)以上の工法と「里川」との接点
- 4)以上の工法は「里川の構想」の活かされるか
- 5)以上の工法と「新里理論」の融合による「新しき公」による「里川」の実現を目指して

④「心象風景『里川』を形作る『華』と『器』についての現状認識」(田口英昭・穂澄)

- 1)「華」＝水 : 身近な水とのかかわり
- ・ 水の原体験を形作る、子供をとりまく水と、そのかかわり方、場の現状・問題点を探る
- 2)「器」＝心 : 日本人の「水」に対する根源的価値観
- ・ オランダと日本(尾張輪中)の低地に住む人々の水への取り組み、かかわり方の違いを比較し、日本人の水に対する本質的な捉え方を探る

⑤「ミツカン工場の水事情、用水利用」(遠山明裕)

国内各工場における水利用の状況、変遷などを探る。メーカーで物作りを担う立場、地域に住む生活者としての立場、いろいろな視点があるなか、東京工場や福岡工場など現地で実際に働いていらっしゃる社員の方と情報交流したり、意見交換なども交えながら、現地と一緒に考えていきたい。

⑥「都市の水辺空間」(遠山明裕)

都市に暮らしたり、働くひとにとって、都会の川との「関わり方」、「距離感」はどんなことになっているのか。

都会の川を「水質浄化」の点からだけでなく、働き、買物したり、食事をするなど1日の大半を過ごす空間として捉えたい。そうした空間のなかで、個人の暮らしや川との関係を活性化させるにはどんなアクションや仕掛けが考えられるのか。

働く立場では、自律的、主体的な関わりをもつアクションをとることは、かなり困難と思いますが、各地で実際に活動している事例などを、主に文献検索などして探ってみたいと思います。

⑦「運河の利用・変遷と、人が抱く水辺への魅力を探る」(日比野容久)

対象：十ヶ川（阿久比川つながる半田運河）

テーマとして選んだ理由

半田の中心であり、歴史的に商業の重要な要素で賑わいのあった半田運河であるが、陸上交通に押されて水運は衰退してしまった。現在、治水・港湾整備で護岸はきれいになっているにもかかわらず、運河の水辺を散策する人はほとんどいない。それはなぜなのか？

具体的な活動ポイント

- ・昔の半田運河の様子を調べる（管理・利用・整備）
- ・近代にどう整備されていったかを調べる
- ・現在の運河の管理の実情把握
- ・行政・地域が運河に望むこと、（あればその具体的な計画）
- ・他の地域の実例をもとに、川（運河）を魅力的にする方法は？
- ・現在のどんな要素が人々を運河から距離をおかせているのか？（弊害要素は？）

⑧「都心のビルに勤務するOLの水意識を探る」(小林由夏)

主旨：現代日本の経済を側面で活性化する東京のOL。特に未婚である場合、一般的には他への目配りより利己的行動が多いとみえるもの。彼女たちの一日の多くはビルで過ごされる。里川構想に一番遠いとも言えるこれら都心のビルに棲息する未婚OLの水意識を明らかにし、彼女達の水あるいは川との接点を探りたい。

研究方法：

- ・博報堂が入っているグランパークタワーのOLへの聞き取り調査を主体とする。
- ・博報堂を中心としたグランパークタワーに勤務する女性の水意識調査をアンケートで同対象者に対し聞き取り（化粧室などでも決行）
- ・グランパークタワービルの水循環の把握
- ・グランパークタワービルの周辺の水環境（運河など）
- ・新川OL（川の横のビル）との比較も行ないたい

⑨「都市生活を維持する共有資源としての水を管理するシステムとして上下水道技術は適切かー東京都の上下水道史のケース」(中庭光彦)

上下水道は都市生活に必要な不可欠なインフラ技術と認知されながらも、そこで造り出された水や排水について質・量共に不信が絶えない。さらに、都市の水供給を分散協力的に守るといっても、農業・工業・生活各用水間の利水調整はけっしてリスクに柔軟に適応できるものとはいえない状況があるため、渇水等が発生した時の安全度も心許ない。ここでは、「なぜ水道という技術に物理的・心理的・社会的距離を感じてしまうのか」という疑問を出発点に、「③視点としての暮らしの水」を踏まえ、問題を明らかにし、里川として

の上下水道像を提案する。

対象は東京都の上下水道とし、他地域との比較、ならびに過去の「渇水時」への対応などを比較することで問題を明示する。方向としては、上下水道の分散・適応的管理の道を探りたい。

⑩「雨水利用」、「中水」から現代「里川」の視点を探る（田口英昭・穂澄）

※詳細未定：現状認識しつつ、研究・提案の方向性を探る予定

⑪「実験的な水利用住宅から見る、家の中、意識の中の里川」（賀川督明・一枝）

流れとして、表に出る前の里川は存在するのか。日常の中の新しい水意識を構築する。

1) 現在実践されている、宅地や住宅内における実験的な「水との関わり」をケーススタディとして調査する。

2) 宅地や住宅内における「水との関わり」の将来の可能性。

（3）まとめ：現代の里川とは何か

前項の各テーマにおけるジレンマの構造等を比較した上で、望ましいと思われる里川像の総括を行う。

4. 研究メンバー

対外的な報告を目的とする「事業研究」と、社員の啓発を目的とする「社員研究」を、とりあえずは分ける。ただし、社員研究でも質の高いものを、どんどん事業研究に取り込む。

- ・ 研究員：吉田、日比野、小林、中庭、賀川組、富田
→内容について対外的な責任をもつ
- ・ 事務：緒方・辻
- ・ 準研究員：荒田、大橋、田口、遠山、宮原、新美
→内容について対外的な責任をもつ必要性は薄い。社内伝道師の役割を併せて持つ。
※準研究員の取りまとめは、吉田、日比野、新美が行う。

	事業研究						社員研究					
	コーディネート	WP執筆	調査・研究	研究会で発表	報告書執筆	事務	コーディネート	WP執筆	調査・研究	研究会で発表	報告書執筆	事務
吉田		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
日比野	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
小林	○	○	○	○	○							
中庭	○	○	○	○	○							
賀川組		○	○	○	○							
緒方						○						
辻						○						
富田		○	○	○	○							
荒田							}	○	○	○	○	
大橋								○	○	○	○	
田口								○	○	○	○	
遠山								○	○	○	○	
宮原								○	○	○	○	
新美												

良質なものをピックアップ

5. 成果物

- ・ 研究報告書の作成
→『水の文化』、センターホームページで紹介予定。
進捗については、『水の文化』の中の「里川研究掲示板」コーナーで報告。
- ・ 水の文化交流フォーラムで中間報告予定

6. 研究会のスケジュール

研究会は、「WP をもとに報告」だけではなく、「報告と議論」を行い、その内容を後に WP にまとめるパターンも可とする。

5月	・ WP 2つ程度
7月	・ WP 2つ程度
9月	・ WP 2つ程度
12月	・ まとめ ・ 報告書目次について

※5月～9月頃、断続的に調査を実施。

※講師を呼んだ勉強会も、適宜企画。